

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	マレーシア、サラワク州での農山村調査法実践演習プログラム	
学部・研究科名	全学教育機構	
実施期間	2017年3月3日～2017年3月11日	
研修先(国・都市・施設名)	マレーシア、サラワク州、ムル国立公園周辺	
参加者数	： 11名	知の森基金からの支援者 ： 11名
プログラム概要	本プログラムは、平成28年度後期の共通教育の教養ゼミ、「環境マインドを現場で体験するゼミ(熱帯雨林)」において実施した。前期の講義科目、「熱帯雨林と社会」のアドバンス・プログラムとして企画した。海外活動先はマレーシア、サラワク州である。サラワクは、熱帯雨林の生物・文化の多様性の宝庫といわれ、かつ森林産物や一次産品を通じて日本と深いかわりをもつ。演習を行ったのは、世界自然遺産に登録されているムル国立公園の周辺である。現地では、国際協力の分野で活用されている参加型農山村調査法(Participatory Rural Appraisal; PRA)を演習した。PRAとは、外部者と地域住民が一緒になって、住民の生活や生計についての情報を集め、分析することによって、彼らのニーズや課題を探っていくアプローチ、手法のことである。現地では、サラワクの先住民族であるブラワン人とブナン人の方々に協力いただいた。	

実施状況・成果

本プログラムの具体的な活動と成果は次のとおりである。

1. 観光業や焼畑農耕を主な生業とするブラワン人に対して、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。
2. 狩猟採集や焼畑農耕を主な生業とするブナン人に対して、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。焼畑農耕の収穫作業を体験したり、吹矢や籐の籠などの作り方を見学したりした。
3. 移動には小型飛行機やボートを利用したが、道中アブラヤシ・プランテーション開発の様子を観察し、貿易を通じた自分たちの暮らしとのかかわりや課題について議論した。
4. マレーシア・サラワク大学のボルネオ研究所を訪問し、信州大学の紹介とムルで行った演習の報告を行なった。ボルネオ研究所長から昼食に招待され、スタッフや学生と食事をはさんで交流した。
5. クチンのサラワク日本友好協会のホー事務局長と日本語講師の大西起子先生を表敬訪問し、日本語を習っている現地の方々と交流した。
6. 旅行の事前教育として平成28年度後期の土日を中心に計6回集まって、PRAの訓練のほか、現地事情の学習などを行った。うち1回は京都大学東南アジア研究センターの佐久間香子先生から特別レクチャーをいただいた。
- 7 参加学生は現地でまとめたプレゼンテーション資料に加え、帰国後に演習レポートを作成した。引率者のコメントを収めた報告集(冊子)として発行する。

ムル周辺では、3つのグループに分かれて PRAの聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーションを遂行した。学生たちは、当初は試行錯誤しつつも、次第に自分たちのもつ語学力で的確な質問をし、数値や図表を利活用し、丁寧に議論する方法を学んでいた。引率教員と引率助手は全行程に帯同したが、学生たちは全員、村人と積極的にコミュニケーションをはかっていた。異文化コミュニケーション、社会人基礎力、環境マインドの醸成といった教育的な効果は顕著であると感じた。なお、成果の検証には、4月中に発行する演習レポート(報告集)も参考にする。また、平成29年度前期の教養科目「熱帯雨林と社会」において、主に本学1年生向けに報告会を予定している。

当プログラムに参加した学生も引率者も大きな達成感と手応えを感じた。毎年数百名が受講する講義科目「熱帯雨林と社会」に比べれば、その人数はごくわずかにすぎないが、参加した学生も教員も講義では味わえない大きな達成感と手応えを感じた。実際、これまで当プログラムに参加した学生のうち1名は、現地NGOにインターンとして数ヶ月間活動に従事し、さまざまな社会体験を重ねている。彼は、現地で一部の日程に合流し、後輩たちにインターン経験に基づく貴重な助言をしてくれた。このように、当プログラムへの参加により、グローバルな諸課題への関心が高まり、その解決に積極果敢に立ち向かう力が養成される。学生には今後も自ら積極的に海外で出て行動してほしい。私自身、今後も本プログラムを継続してまいりたい。

学生の声①ー農学部 学生

私がこのゼミに参加しようと思った理由は、所謂発展途上国と呼ばれる国の農業に興味を持っていたからである。前から日本では滅多に見ることの出来ない焼畑農業、プランテーション農場など、海外に行かなければならない景色を実際に目にしたいと思っていた。帰国した私はもっと別の国にも行って様々な農業の現場を知りたいと考えたようになった。もし他にも発展途上国に行く機会があれば、自分をもっとスキルアップさせて、多くの国を訪れてみたいと今は思っている。

学生の声②ー医学部 学生

ムル国立公園でトイレに入ったとき、村には鏡がなかったため久しぶりに自分の顔を見た。日本では至る所に自分の姿を映せるものがあり、それが当たり前のように過ごしていたのに、無くても暮らしていけるのだなと不思議な感じがした。マレーシアから帰ってきて感じたのは、また行きたいという思いであった。今度は村に長期滞在をして、村に住む方々と一緒に家の前の椅子に腰掛けて四方山話をしたいと企んでいる。

焼畑農耕の収穫体験
(サラワク州、ロング・イマン村にて)



農山村調査法の実習
(サワラク州、ロング・イマン村にて)

